

途上国に住む盲目の子供たちを支援する



NPO法人

# ヒカリカナタ基金



ヒカリ届けます 遥かカナタまで

## ●特集●

支援国ミャンマーで 8人12個の瞳に届けたヒカリ





ミャンマー小児眼科医療プロジェクト 2018年10月

## 8人の子供たち全員に ヒカ리를届けることが出来ました!

### 10月11日 『タン先生』

ヤンゴンに着いた翌日の午後今回手術していただける国立ヤンゴン眼科病院の小児眼科医長タン・トゥン・アウン先生にお目にかかりました。待ち合わせ場所のホテルのロビーに行くともう待っていてくださりとても優しい笑顔で迎えて頂きました。握手した手はとても温かく私はこの先生で良かった!この先生なら絶対に成功する!大丈夫だと何の根拠もありませんが直感しました。自己紹介の中でタン先生が白内障手術の最先端技術をオーストラリアで研修してこられたとのこと力強い言葉でした。明日は8人・12個の目の白内障眼内レンズ挿入の手術をすると言われました。そして日本では絶対に有り得ない、私達が手術室に入りカメラでの撮影 また次の日回診時の撮影・インタビューも許可して下さいました。日本で応援・支援していただいている方々に詳しく伝える事が出来る環境を整えて頂き、とても有り難いと感じました。

### 10月12日 『手術室』

いっぱい外来患者さんの中を通過して私達は手術室に向かいました。スタッフの皆さんの手際良い協力でガウン・マスク・ヘアーキャップを着けてもらい中へ入りました。中央に最新鋭の機械とベッドがあり周りには心電図モニターをはじめME機器が

設置されていました。正直こんなに機器が揃っていると思ってなかったのでとても驚きました。

麻酔科の先生や看護師さん全員で10人位のスタッフと私達7人で手術室がいっぱいになりました。手術ベッドでは2番目の患者チューくん(8歳)の手術が終わり麻酔の回復を待っている状態でした。

そして直ぐ回復し入れ替わりにピピちゃん(8歳)が看護師さんに抱っこされて来て横になり麻酔され眠りました。私達は壁際にある大きなモニターで先生の手術の様子を見守ります。初めはまるでドラマを見ているようで直ぐ横で手術が行われているのが不思議な感じでした。まず目を開いて固定します。次は白目と黒目の境界の上部をメスで極小さく切開し、そこから細い管を入れ白く乳化した水晶体を吸引除去し、その代わりに眼内レンズを挿入します。レンズは小さく折りたたんであったものが目の中に入ると開いて黒目の上に装着されるようでした。その



様子がモニターではっきり分かり感激でした。手術前には濁ってグレーになっていた黒目が術後はスッキリ綺麗な黒目

になりました。ピピちゃんの手術は1時間弱で無事終了!私達も退出しました。

7人もの大人数を手術室に入れて頂き、周りをウロウロしたり写真を撮ったりしましたがスタッフの皆さんが快く受け入れて下さり心より感謝しております。

### 10月13日 『回診』

手術翌日診察室前の廊下に目をガーゼで覆った子供たちが一列に並び座っていました。反対側にはご家族が心配そうに待っていました。緊張の中看護師さんが順番にガーゼを外していきます。一人目、二人目、見える!と言ってくれた時涙が溢れました。お母さん方と握手し、良かった!おめでとう!と言う言葉は分からなくても気持ちが通じたと分かる瞬間でした。

次は昨日手術を見たピピちゃん。長年見えなかった目を開けることの恐怖があるのか、怖がって泣いてます。おばあちゃんが横に来ましたがまだ目を開けません。タン先生が来てやっとゆっくり目を開けました。笑顔です!見えます!先生の手が動く方に目が動いています。目で追ってます。良かった!感激でした。

ひとりの男の子が「ありがとう!」と日本語で言いました。またまた感動の涙です。女の子が竹内先生にプレゼントを持って来てくれていました。先生は子供たち全員と力強く握手し「頑張れよ!」「大きゅうなれよ!」と一人一人に心のこもった声をかけられたのです。私達はその姿を見ているだけで更に胸が熱くなりました。

今回のミャンマー小児眼科医療プロジェクトに関わって下さった MJCPの皆様、岡山大学名誉教授の岡田先生、ヤンゴン眼科病院のタン先生、スタッフの皆さん、通訳して下さいました。本当にありがとうございました。この成功によってヒカリカナタ基金のメンバーが「このプロジェクトを絶対に今後も継続していこう!!」という大きな目標を与えて頂きました。帰国前日、また一人の子供の手術が決まりました!

中川美登里



# ミャンマー訪問記

NPO 法人 ヒカリカナタ基金 理事長 竹内 昌彦



MJCPという組織が岡山にある。ミャンマー・ジャパンコラボレーションプロジェクトの略で、岡山大学医学部の名誉教授岡田茂先生を中心にした組織だ。ミャンマーの医学生を日本に招き、高度な医療技術を教え、ミャンマー医療のスキルアップをはかろうと活動しておられる。その歴史は長く、すでに多くのミャンマーの医学生がこのプログラムで学び自国で活躍しているそうだ。素晴らしい!

岡田先生はとにかくエネル

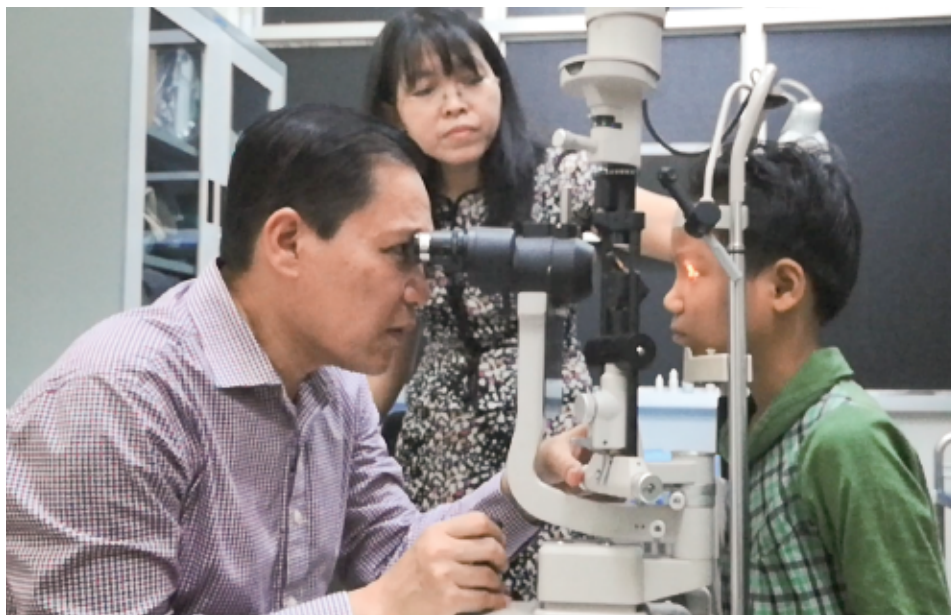
ギッシュな方でその熱量にはいつも驚かされるばかりだ。ヒカリカナタ基金はこの岡田先生に、ミャンマーの目の不自由な子供たちの視力改善活動への協力をお願いした。もともと医療関係の組織であるから、その動きは迅速で、まもなく目の手術可能な子供が8人も見つかった。その手術に立ち会うため、今回のミャンマー訪問の旅が実現し、ヒカリカナタ基金からは6人が参加することになった。10月10日の早朝、岡田先生を加えて総勢7名は岡山空港に集合。羽田から成田に移り、ここからミャンマー第1の都市であるヤンゴンに向かった。

子供たちの目の手術は12日の朝から始まった。国立眼科



病院に行き、まずはヒカリカナタ基金からの手術費の贈呈式を行った。私の個人的な感覚から言わせていただくと、こういった式典には少し恐縮してしまう。挨拶をしろと言われて10分ほどしゃべった。物価が日本の5分の1以下のミャンマーにとって、私たちのお金は大きな力になるのだろう。式典に参加されたミャンマーの人たちからの強い感謝の気持ちが伝わってきた。

なによりも驚いたのはミャンマーの眼科の医師タン先生を中心とする医療スタッフの対応だった。私たちが手術室に入り、写真を撮ることまで認めてくださり、笑顔で迎えてくださった。全盲の私は手術の邪魔にならないように、手術室の隅っこで椅子に座り、全身を耳にして、部屋の雰囲気を感じ取った。ヒカリカナタの仲間たちが「8歳くらいの子が運ばれて来たよ」「麻酔が始まったようだ」「濁ったものを吸い出しているみたい」「眼内レンズがうまく真ん中に入ったのがモニターに映っているよ」な



どと手術の様子を少しずつ耳元でささやいてくれる。緊張した時間を1時間ほど過ごして手術室を出た。こんなことは一般常識からはとても許されることではないだろう。

そしてさらなる興奮は次の日の朝に訪れた。手術後に子供達の目を覆っていた包帯を取り外す現場に立ち合わせてくださ



たのである。子供たちの目から次々と包帯が取り除かれていく。おそろおそろ目を開く子。医師からの指示があっても「こわい」と言ってまぶたを堅く閉じる子。緊迫した空気の中で、一人一人が医師の前で視力が改善していることを確認していった。昔は見えていたのか、お母さんの服の色を確かめる子、目の前か

ら動いていく医師の指を視線で追いかける子、全てが光を取り戻したことを証明する反応だった。「この孫を残しては死ねない」と言っていたおばあちゃんが泣いていた。母親からは両手をあわせて拝まれた。子供たちはおぼえたばかりの「ありがとう」を連発する。お別れのとき、次々とやってくる手のひらと握手した。大きい手には「おめでとう」小さい手には「大きくなれよ」と声をかけた。私が幼いとき医師から「この目は一生、治りません」と言われた時の絶望、7歳で死ななければならなかった長男の無念さを今ほんのわずかでもはらすことができた。この子たちに希望の光を届けられたのだ



から!あたたかな想いで胸がいっぱいになった。このミャンマー訪問で、手術費や医療器具など100万円以上をヒカリカナタ基金から支出したが、今回ほどこの金額を安いと思ったことはない。多額の旅行費を自費で参加してくださった仲間たちも「来てよかった」と言ってくださった。この喜びと感動をもっともっと大勢の人たちに広げていき

たいものである。

もう一つ、今回のミャンマーで私が個人的に強く感じたのは「ゲンキークリニック」という

マッサージの治療所で受けた日本あんまである。盲学校で6か月間、日本人の先生に習ったという全盲の施術者ソエさんと、かたことの英語で会話しただけなので、ほとんど何も知ることはできなかったが、なるほど6か月のあんまである。けっして上手とはいえないが、一生懸命私の全身に挑戦しようとする気



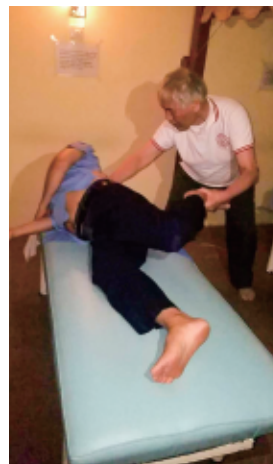




持ちが伝わってきた。私の体の中に「元盲学校教師」の血が動き出す。治療が終わってから施術者に座ってもらい、私のあんなまのほんの一部を彼の肩と首に披露した。彼の口からは「日本に行って日本あんまを習いたい」の言葉が出た。私にもう一つ体があったら、ソエさんのような手術をしても治らない目の不自由なミャンマーの人たちに自立し、よりよく生きるための力を与えることができるかもしれないと思った瞬間であった。

9日間の旅程は飛ぶように過ぎて行った。その間、ミャンマーで出会った人たちはみな、

私たち日本人に対して親切だった。事実、ミャンマーには親日の方が多いと聞く。これは日本人がミャンマーに対して長年行ってきた、見返りを求めない支援の賜物のように思う。「相手にやさしくすれば自分もやさしくされる」そしてお互い



の間を行きかうやさしさがやがて平和の種となる。人と人の関わり合いの中で、当たり前だけれどとても大切な法則が、そこにはある

ような気がする。そんなことを考えながら日本への帰途についた。長旅を終えて岡山空港に降り立ったとき、大勢の友人たちの出迎えを受けた。ウイークデイの日中、それぞれに忙しい仕事の合間をぬってのねぎらいの言葉に

胸が熱くなった。私がそして「ヒカリカナタ基金」が大勢の人たちに守られていることを改めて知った。今回のことも大勢の人たちの協力がなければ実現することができなかった。みんなの思いが8人の子供たちの未来を開いた。命の続くかぎり、この喜びを日本中に世界中に広げていきたいものである。

協力して下さったみなさん、本当にありがとうございました。





## 両目を手術したピピちゃん。

### そのおばあちゃんからのメッセージ

日本の皆さん、ピピの目の手術を支援してくださって本当にありがとうございました。おかげさまで無事見えるようになりました！もし目が見えないままだったなら、この子は私の助けなしでは生きて行けなかったでしょう。私はこの子より先には絶対に死ねない。私が死んでしまったら、誰がこの子を守ってくれるのか。苦しくて悲しくて、一体この先どうしてよいのか分からずに、必死でお祈りする毎日でした。一生見えない目のままで生きる運命だったピピの人生を救ってくださったみなさん、本当にありがとうございます！こんなうれしい事はありません。



## 賛助会員募集中！

【年会費】個人の方（1口）3,000円  
法人の方（1口）5,000円

何口からでも結構です。賛助会員の方からいただいた年会費が集まって、子供達の目の手術代となります。皆様のあたたかい思いやりをひとつに結集して、できるだけ大きな支援を遠い国の子供達に送り届けましょう！ご入会くださる方は、下記のいずれかの窓口から年会費をお振込ください。後日、メールか郵送で活動報告の広報誌をお届けします。来年以降の継続、退会は自由です。

※年会費以外に、通常の寄付も随時受け付けておりますので、同じく下記窓口からよろしくお願ひします。

### 銀行 金融機関

■ ゆうちょ銀行もしくは郵便局からの場合  
ゆうちょ銀行  
振替口座  
口座記号番号：01380-4-106091  
口座名義：特定非営利活動法人 ヒカリカナタ基金

■ 他の銀行、金融機関からの場合  
銀行名：ゆうちょ銀行（金融機関コード9900）  
店名：一三九（イチサンキユウ）（店番139）  
預金種目：当座  
口座番号：0106091  
口座名義：特定非営利活動法人 ヒカリカナタ基金

### インターネット

■ 「ヒカリカナタ基金」ホームページから。 [www.hikarikanata.com](http://www.hikarikanata.com)



NPO法人  
ヒカリカナタ基金

◎事務局  
〒700-0925 岡山県岡山市北区大元上町12-11  
Tel：086-242-3535 / Fax：086-242-3311  
E-Mail：npo@hikarikanata.com

[www.hikarikanata.com](http://www.hikarikanata.com)

ヒカリカナタ基金



竹内昌彦「ヒカリカナタ基金」  
[www.facebook.com/hikarikanatakikin](http://www.facebook.com/hikarikanatakikin)



竹内昌彦  
[twitter.com/masahikotakebot](https://twitter.com/masahikotakebot)

<次号予告>次回は第2回ネパール訪問